

ジャガイモシストセンチュウの現状

○ばれいしょ産地では、甚大な被害を及ぼす
ジャガイモシストセンチュウの発生面積拡大が
問題。

ジャガイモシストセンチュウが発生すると

- ①収量が最大で**50%以上減少**
- ②**10年以上**シスト体で土壌に残存



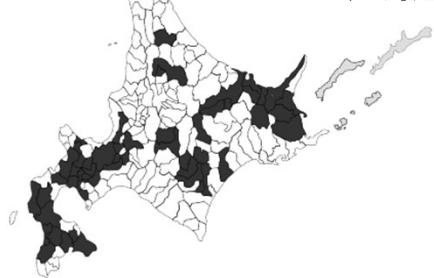
根に付着したシスト体



○土壌に長期間残留し、**種イモを媒介して広まる**
ことから、**発生ほ場での種ばれいしょ生産を厳**
しく制限。

○特に**種ばれいしょ主産地の北海道**で発生が多い
が、**北海道は我が国の種ばれいしょ供給基地**
であり、**全国に影響**。

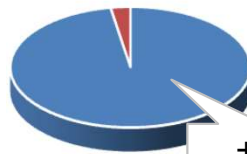
ジャガイモシストセンチュウ発生地区地域
(北海道)



資料：北海道農政部

ばれいしょの
採種生産量全国シェア
(令和6年度)

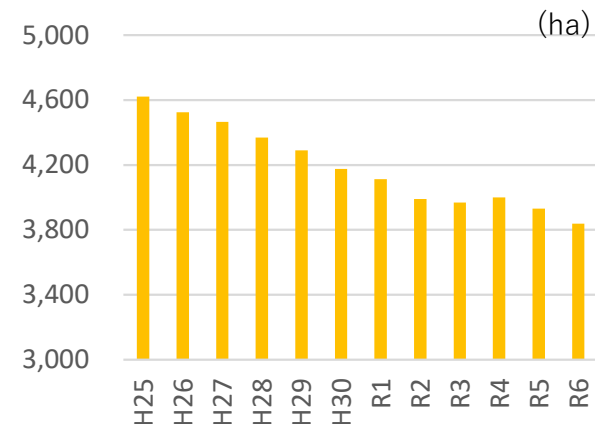
府県 3%



北海道
97%

○ジャガイモシストセンチュウの発生面積拡大は、
種イモほ場の確保困難、種イモ不足に繋がる。
⇒**ばれいしょの安定生産・安定供給**にも影響。

北海道における種ばれいしょほ場合格面積（採種ほ）



○ばれいしょを持続的に生産していくためには、
ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の早期
普及が喫緊の課題。

シストセンチュウ抵抗性品種のメリット

- ・発生ほ場でも減収せず、**既存品種より高収量**
 - ・**土壌中のジャガイモシストセンチュウ密度を低減**
することから、抵抗性品種を作付けることで、**営**
農を継続しながらまん延防止を図ることが可能
- ⇒ばれいしょ産地の持続的な発展に寄与

用途別のジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の普及状況

○でん粉原料用品種はジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種への転換が完了。

○**青果用、加工用**はジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の**普及が遅れている**。

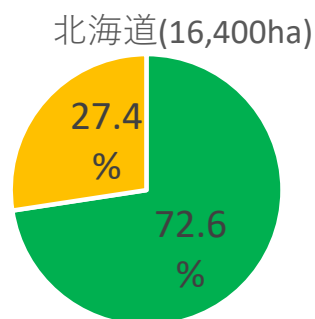
○青果用の主要品種である男爵薯、ニシユタカ、メイクインは**ジャガイモシストセンチュウ感受性品種**で、**全国のばれいしょ作付面積の約3割**を占めている。

○一方、**多収で品質の優れたジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種が開発**されているものの、普及に遅れが見られる。

ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の作付面積割合(R4実績)

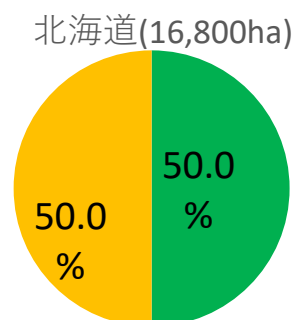
■シスト感受性 ■シスト抵抗性

青果用



加工用

(チップ・サラダ・フライ等)



既存の主力品種
(青果用)

全て感受性品種

①男爵薯
(作付割合16%)

②ニシユタカ
(作付割合8%)

③メイクイン
(作付割合7%)

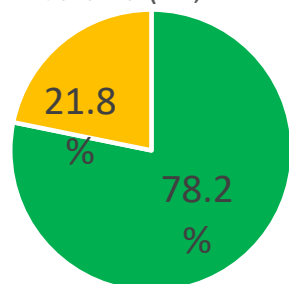
代替候補と期待される
抵抗性品種

ゆめいころ
きたかむい
キタアカリ
とうや

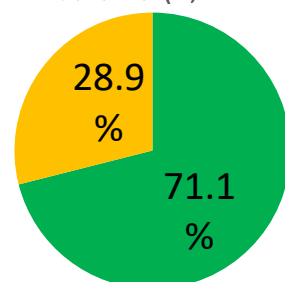
アイマサリ
さんじゅうまる
しまあかり

ピルカ
はるか

都府県(13,600ha)



都府県(4,000ha)

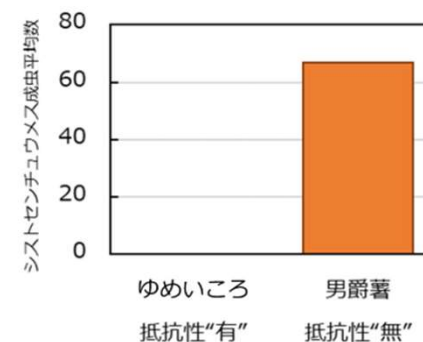
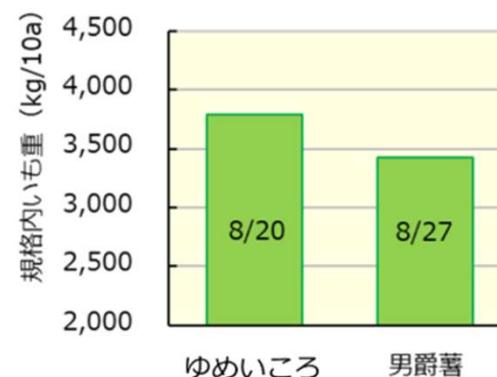


ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種導入のメリット

○ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種は従来品種を改良し、生産性等が向上しており、導入には様々なメリットがある。

対象	メリット
生産者	<ul style="list-style-type: none"> 多収、安定生産による所得向上 農薬使用の低減 種ばれいしょの安定生産・供給 <p>作付意欲の高まりや持続可能な生産に寄与</p>
実需者	<ul style="list-style-type: none"> 安定的な原料調達が可能 減農薬栽培の原料調達が可能 芽が浅くて加工しやすい 皮がきれいで外観がよい 歩留まりがよい <p>SDGsに貢献、コスト低減</p>
消費者	<ul style="list-style-type: none"> 芽が浅くて調理しやすい 皮がきれいで外観がよい 良食味又は従来品種と同等の味 <p>多様で豊かな食生活に貢献</p>

(参考) 「男爵薯」から置き換え可能な「ゆめいころ」



ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の普及に向けた推進策

- 種ばれいしょ産地を保全するためにはジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種への転換が急務であることから、農林水産省では、**「ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の作付拡大のための目標」を策定し、普及に向けた支援**を実施。

ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の作付拡大のための目標（平成31年2月策定）

【主にでん粉原料用に仕向けられる品種】

- ・ 既に生産者団体が自主的に策定・実行している「抵抗性品種転換計画」に基づき、すべてのほ場について、2022年産までに抵抗性品種の作付割合を100%とする。 **【2022年完了】**

【主に加工用に仕向けられる品種】

- ・ シストセンチュウの発生が確認されているほ場については、2028年産までに抵抗性品種の作付割合を100%とする。
- ・ その他のほ場については、2028年産までに抵抗性品種の作付割合を80%とすることを目指す。

【主に生食用に仕向けられる品種】

- ・ 男爵薯、メイクイン等（非抵抗性品種）による産地化が図られていることに鑑み、シストセンチュウの発生が確認されているほ場における抵抗性品種への転換に優先的に取り組み、シストセンチュウの発生が確認されているほ場については、2028年産までに抵抗性品種の作付割合を100%とする。
- ・ その他のほ場については、抵抗性を付与した、男爵薯、メイクイン等に代わり得る品種の開発等を踏まえ、抵抗性品種への転換を進める。

対策

○ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の導入支援

畑作物産地生産体制確立・強化緊急対策事業（令和6年度補正）

⇒ジャガイモシストセンチュウ類抵抗性品種の作付面積増加分に対し支援（3,000円／10a）

○シストセンチュウ感受性品種の原原種の配布制限

ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大を図るため、非抵抗性品種については、都道府県ごとに前年の配布実績を超える数量の原原種の配布を原則として行わない。